

* 当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

〈研究課題名〉「挑戦性」の人類学：現代アフリカを生きる人びとの実践の探求

(令和7年度第2回研究会)

〈日時〉令和7年7月12日(土) 午後3時～午後5時

〈場所〉オンライン会議室

〈報告者1〉緒方しらべ(AA 研所員)

〈報告者2〉板久梓織(東京都立大学)

〈報告内容の概要〉

1) 『*Ethnographies of Uncertainty in Africa*』序章の検討(緒方しらべ)

本共同研究のテーマ、「挑戦性」や「冒険性」に関わる先行研究の一例として、2015年にロンドンのPalgrave Macmillanから出版された、Cooper, E.とPratten, D.による共編著『*Ethnographies of Uncertainty in Africa*』の背景と本書の内容について緒方から説明があった。そのなかで、一点目として、本書で扱う「不確実性(uncertainties)」が不安定性(insecurity)、不定性(indeterminacy)、リスク、曖昧さ、両義性(ambivalence)、不明瞭さ、不透明さ(opaqueness)、不可視性、神秘、混乱、疑念、懷疑、偶然(contingency)、可能性、仮定性(subjectivities)、希望といった概念群を射程に入れていること、二点目として、不確実性を、否定的で制約的な意味として捉えるだけではなく、積極的で実り多く、生産的な枠組みのなかで捉える可能性を本書が提示していることを確認した。次に、本書が第一部の社会的偶発性(social contingencies)および関係性(relational)と第二部の未来像(future visions)ないし時間制(temporal)に大別される8つの論文から成っていること、そのうえで、不確実性に関する事例研究(エスノグラフィーの執筆)において、方法論的に物語や個人の伝記に強く依拠することをふまえ、「仮定法のムード(subjunctive mood)における行為」および「仮定法的主体(subjunctive subject)」を捉えること、すなわち、さまざまな不確実性の構造に応じて異なるかたちで希望し計画する方法(ways)、不確実性に直面したときに採用される戦術(tactics)、そして不確実性とそこでの可能性に対して決然と開かれている姿勢を描き出すことが、本書において強調されていることを確認した。

この序章に基づき、緒方は、本共同研究が対象とする人たちが現代アフリカを生きる人びとが不確実性のなかを生きていること、また、それが必ずしもネガティブな要素としてではなく、ポジティブな要素となって、人びとの実践を生産的(productive)あるいは創造的(creative)なものにしている、ということをエスノグラフィーによって描こうとする点は、本書の方向性と重なることを指摘した。また、不確実性の研究の重要な軸として本書

が提示する関係性や時間制、社会的偶発性や未来像、さらには假定法的主体性のように、本共同研究も挑戦的／冒険的实践の研究に際して必要となる概念を検討する必要があることも指摘した。加えて、本書と本共同研究の違いとして、本共同研究はアフリカにおける「不確実性」を前提にそこからスタートするというよりは、(私たちが見てきた・経験してきた) 必ずしも紛争や政情不安・危機に瀕しているとは限らないアフリカでの日常や個人の人生からスタートする点、都市と農村の違い、地域性、個別性への目配りと議論も重視する点を挙げた。最後に、本書で言及されている 2000 年代から 2010 年代にかけて出版されたものを中心に、複数の先行研究 (Johnson-Hanks 2005 ; Mbembe & Nuttall 2004; Simone 2005; Geschiere 2013; Appadurai 2013; Jackson 2002 など) を押さえておくことも共有した。

ディスカッションでは、コマロフやゲシーレの議論には、グローバルな経済秩序の中に、これまで確実だったものがそうでなくなり、ありえないことが起きていくというモダニティの格差・不確実性が増しているという議論が前提としてあること、ホワイトが指摘するように、不確実な状況において実践的な知識や技術 (know-how) よりも誰とつながっているか (誰を知っているか / know-who) が重要性であること、その一方で、モダニティの議論以前から不確実性 (不確定性) はあったであろうことについても考える必要があることが指摘された。その意味においては、開発プロジェクトや NGO と直接関係のない不確実性の要素も探る必要があるであろうし、その土地や個人の過去 (歴史的文脈)、都市、農村、ジェンダーによっても異なる不確実性のあり方が見えてくるかもしれない、不確実性を議論する際には呪術も避けられない要素になる、といった意見も出た。

2) Invisible Cities III (Kinshasa: Tales of The Invisible City, 2014) の検討 (板久梓織)

本共同研究と直接的に関連するアフリカのモダニティ研究のひとつとして、板久は、ベルギーの人類学者 Filip De Boeck とフォトグラファーの Marie-Françoise Plissart による共著『Kinshasa: Tales of The Invisible City』の中の一章、「Invisible Cities III」の背景と概要を説明した。本章は、アンゴラ共和国とコンゴ民主共和国の国境地帯女性のダイヤモンドの密輸に従事する女性、Mado の語りによる彼女自身のライフヒストリーの一端を描いたものである。これについて、板久は、本研究で検討する「挑戦性 (冒険性)」の検討として、コンゴにおける男性優位のジェンダー規範への挑戦性をもつ存在として、または違法な越境やインフォーマル経済圏での活動は国家の存在や国家による規制への挑戦として、あるいは家族を養うために自己犠牲をとまなうことをモラルや法への挑戦として捉えられることを提示した。また、挑戦性とは異なる概念で捉える可能性についても示唆した。

ディスカッションでは、挑戦性や冒険性と直結するものとして、前半で検討した文献 (*Ethnographies of Uncertainty*) で注目されていた「假定法的主体性 (Subjunctive Subjectivities)」を、Mado の語りと行為に見いだせることや、その主体性・積極性と並存し

うるダイヤモンドやその利益を得るための手段への依存性、ダイヤモンドや貨幣の持つ魔物のような側面と鉱山のある地域の特殊性について意見が交わされた。さらに、「語り」について、本章はひとりの女性（妻・母親）のものであったが、子どもなど関係するほかの人たちの視点の存在や、たくましさ強く印象づける彼女の生き方を美化したりそれをアフリカらしさとしたりするような書き方の危険性についても話し合った。ひとりのライフヒストリーからどこまで集合的な「挑戦性」や「冒険性」を見出せるのかという点や、本章のようなダイナミックでスケールの大きい事例がない場合でも分析・考察は可能かといった懸念点については、ひとりを対象にしても必ずその社会・文化・経済・政治的背景や関係者の言動が関わることや、むしろ本章のような「ダイヤモンド鉱山」「密輸」「裁判」「投獄」「波乱万丈の人生」といった特徴的な出来事がない人生や日常から、冒険性をいかに見出せるかが本共同研究のねらいになることを共有した。

〈研究会全体を通して〉

今回は完全オンラインの読書会の形式で行った。研究会の開催としては2回目であり、最初はややぎこちなく、ディスカッションが若干しづらい部分も多少はあったが、後半はスムーズに意見交換することができた。前半が論集の序論、後半がエスノグラフィーの中のひとつの章であったため、理論的背景と民族誌的記述の両方について考えることができ、パソコンに張り付かなければならないオンラインの研究会にもかかわらず集中して意見を交わせた。メンバーは、この共同研究会がどのような理論の方針で進んでいくのか、また、どのような事例で書いていくのか、まだ手探りの状態である。今回は先行研究を参考に、その手がかりをひとつ掴む場となった。次回も先行研究から学び、かつ、批判的に検討しながら、「挑戦性」や「冒険性」という概念について議論を重ねていきたい。